

平成29年度

第1回 静岡県総合教育会議

議事録

平成29年7月7日（金）

第1回 静岡県総合教育会議 議事録

- 1 開催日時 平成29年7月7日(金) 午後4時から5時15分まで
- 2 開催の場所 県庁別館8階第1会議室A、B、C、D
- 3 出席者 知事 川勝平太
教育長 木苗直秀
委員 斉藤行雄
委員 興直孝
委員 渡邊靖乃
委員 藤井明

地域自立のための「人づくり・学校づくり」
実践委員会副委員長 池上重弘

4 議 事

- (1) 社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励
(子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会の創出)
- (2) その他

【開 会】

事務局： ただいまから平成29年度第1回総合教育会議を開催いたします。
本日は、お忙しい中御出席をいただきまして、まことにありがとうございます。
私は、本日司会を務めます文化・観光部総合教育局の長澤と申します。よろしく願いいたします。
本日の議事は、「社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」への奨励
(子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会の創出)」であります。
開会に当たりまして、知事から御挨拶申し上げます。

川勝知事： どうも、お忙しい中、ありがとうございます。私、7月4日まで第2期が終わりまして、第3期、6月25日の選挙で当選いたしましたので、7月5日から3期、これから4年間になりますけど、よろしく願いいたします。
まず、本日は、池上副委員長先生が実践委員会の代表として御出席いただいているということで、御礼を申し上げます。
昨年度の総合教育会議の成果は、教職員の多忙化の解消や子供たちへのきめ細やかな指導を狙いとする静岡式35人学級編制の段階的な下限の撤廃、これは25人という下限があったのですが、先生方の御賛同を賜りまして、また現場からの要求がございまして、下限を撤廃する

ということで、向こう3年間で下限を撤廃できそうです。下限を撤廃しますと、どうしても先生の数を増加しなければいけませんので、そのために若干の時間がかかるということがございます。

それから、地域ぐるみ、社会総がかりの家庭教育を支援する「しずおか寺子屋」の開設などが実現しました。しずおか寺子屋につきましては、木苗教育長先生方の肝いりで、先日、社説にも書かれるようになりまして、お兄ちゃん、お姉ちゃんから子供たちが教えてもらうということで、両方にとっていいということでございます。

きょうの委員会は、今御案内がございましたとおり、「社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」への奨励」でございます。この基本は、富士の士という字、士を言い換えると徳のある人ということで、有徳の人の育成を進めるに当たりましては、文科省が重視しております英・数・国・理・社などの知性を高める学習はもちろん重要ですが、それ以外にも農林水産業、工業、商業、芸術、スポーツ、例えば将棋と、29連勝、残念ながら30勝はなりませんでした。そういう将棋で生きていくという14歳、それも一つの道であると存じます。こうした体で覚える技芸を磨く実学もやはり大切であると存じます。

本日は、この技芸を磨く実学の奨励のうち、特に子供たちが、本県が誇ります農林水産業、ものづくりの工業、商業等に触れる機会の創出について、御協議を賜りたいと存じます。

国内外から憧れを呼び、魅力ある地域づくりのためには、それを担う人づくりが必要であります。世界クラスの人材・資源群が、富士山が世界文化遺産になってから50件を超えました。そのような本県におきましては、実学の教材となる人材・資源もこの地元にあるということでございます。これらを生かして、社会総がかりでこのような実学を奨励することで、子供たちが生きる道としての仕事を学ぶことができるように、教育長始め、教育委員の皆様の御意見を賜りたく存じます。よろしく申し上げます。

事務局： ありがとうございます。

次に、木苗教育長から御挨拶をお願いいたします。

木苗教育長： 御紹介いただきました教育長の木苗直秀でございます。

教育委員会を代表いたしまして御挨拶を申し上げます。

知事が今お話しになられたようなことで、重複する部分はありますけれども、本年度よりこの総合教育会議も3年目を迎えております。平成28年度、昨年度は5回の協議を通じまして、個々の才能や個性を伸ばす多様な学習機会の提供や、地域ぐるみ、社会総がかりで取り組む教育力の向上、こういうようなことを中心に教育現場の活性化に資する具体的な方法について議論を深めまして、静岡式35人学級の下限撤廃、あるいは静岡式寺子屋の創出、このような事業を実施してきま

した。

また、平成27年度の協議により、事業化に至ったスポーツ人材バンクにつきましては、子供のスポーツ活動の充実に向けて、100人を超えるスポーツ指導者の登録が既にできております。

さらに、グローバル人材育成基金を活用した高校生の海外留学につきましても5年間で900人、初年度だけでは100名ですが、今年度からは200人の高校生、またその指導者である教員に海外に行っていただくというようなことで、グローバル人材も育成していこうということで進めておりました。こちらも順調に進んでおります。

特に本年度は、県教育振興基本計画の最終年度となりますので、有徳の人づくりに向けて、本会議で具体化された事業につきまして着実に推進していきたいと考えておりますし、また文・武・芸、これについても、オリンピック、来年のインターハイもありますし、とにかく元気で、そしてグローバルに考える人材育成というものをつくっていききたいと思っています。

なお、本日は社会総がかりで行う技芸を磨く実学の奨励ということで、これをテーマとしておりますけれども、私たちは高校生だけではなく、今は幼稚園、小学校、中学、高校、そしてこの4月1日からは大学との連携ということで教育委員会は進んでおりますので、ぜひ皆さんからのいろいろな御助言を賜りたく、ひとつよろしくお願ひしたいと思います。皆さんの忌憚のない御協議の場となることを期待させていただきまして、御挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

事務局： ありがとうございます。

それでは、議事に入りたくと存じます。

これからの議事進行につきましては、川勝知事をお願いいたします。よろしくお願ひします。

川勝知事： それでは、次第に基づきまして、本日の議事を進行いたします。

本日の議事は、「社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」への奨励（子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会の創出）」であります。

事務局から資料の説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局の総合教育課から説明いたします。

お手元の資料の次第から2枚めくっていただきまして、平成29年度総合教育会議年間スケジュール（予定）をごらんください。

今年度の総合教育会議は、4回の開催を予定しております、協議事項は表に記載のとおりであります。よろしくお願ひいたします。

1枚めくっていただきまして、資料の1ページ、左上に協議事項と

ある資料をごらんください。

本日の協議事項に関する論点でございます。

「有徳の人」の育成には、「知性を高める学習」だけでなく、小さなころから「技芸を磨く実学」に触れる機会を与えていく必要があります。社会的、職業的自立に必要な能力や態度を育てるには、農林水産業、工業、商業等を体験、体感することが重要となります。

そこで、本日の論点につきましては、黒く示してあります教育現場でのプロフェッショナル人材の活用及び子供たちが仕事の現場を体験する機会の充実といたします。

その下の四角の枠にありますように、子供たちが農林水産業、工業、商業等を学ぶ上で、地域で活躍する方々に学校現場へおいでいただく形、また子供たちが地域に出て体験する形の双方がありますが、これらをどのように活発化させ深めていくかについて御意見をいただければと存じます。

なお、この論点につきましては、地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会におきまして御協議をいただきました。これらにつきましては、後ほど実践委員会を代表いたしまして、池上副委員長から御説明をいただきます。

次に、資料の5ページをごらんください。

資料2といたしまして、社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励に関する県教育振興基本計画における位置づけをまとめてございます。

次に、別冊の資料でございます。別冊の参考資料をごらんください。別冊の参考資料の1ページをお開きください。

小・中学校の授業の実施状況等についてまとめてございます。

まず、1は小学校、2は中学校の法定の標準授業時数でございます。各学校では、この標準授業時数を上回るように計画を立てて授業を実施しております。

実技系の教科を太枠で囲んでございますが、座学中心の教科と実技系の教科は、学年ごと、おおむね2対1から3対1の比率で実施されております。

次に、2ページをごらんください。

教育活動支援のための外部人材の導入等の状況について、政令市が設置する学校を除く平成28年度の状況をまとめてございます。

まず、1の(1)の①にございますとおり、ほぼ全ての学校におきまして、学校の教育活動に外部人材を活用しております。

また、②にございますとおり、全ての校種におきまして、9割以上の学校が授業で外部人材を活用しております。

次に、4ページをごらんください。

2の(1)にございますとおり、多くの学校が勤労観や職業観を育む教育を学校全体、あるいは特定の学年で計画的に実施しております。

その下の(2)の①を見ますと、中学校ではほとんどの学校が職場体験を実施しております。

また、次の5ページでございますが、5ページの上の(3)の①を見ますと、小学校では7割弱、中学校では5割強の学校におきまして、職場見学を実施しております。

次に6ページをごらんください。

(5)を見ますと、高等学校では6割強、特別支援学校ではほとんどの学校におきましてインターンシップなどの職業体験、就業体験活動を実施しております。

次に、7ページから12ページにかけましては、今回の論点に関する県の取組事例についてまとめてございます。このうち小・中学校と高等学校におけるキャリア教育の取組について説明をいたします。

13ページをごらんください。

まず、小・中学校におけますキャリア教育の取組でございます。

1にありますとおおり、小・中学校ともに総合的な学習の時間等を活用し、地域とかかわり合いを持ったキャリア教育を行っており、2の具体的な実践事例を見ますと、例えば1の掛川市では、中学3年間を系統的に捉えて、地元を学び、地元で働き、地元の将来について提案する「掛川学」に取り組んでおります。

次に、15ページをごらんください。

高等学校におけるキャリア教育の取組でございます。

1にありますとおおり、県内企業の実力を肌で感じ、将来県内企業で活躍する意識を高めるために、県内企業の海外工場におきまして、高校生の就労体験等を実施しております。

次に、16ページ下段の4. ふるさと人材育成事業をごらんください。

郷土で活躍する人材を育成するために、学校が行う職業講話等に県内で活躍する経営者等を講師として派遣しております。

最後に、机上に参考といたしまして、県教育委員会が作成いたしました県立高等学校と産業界等の連携状況及び地域学の冊子をお配りしておりますので、御参考にしていただければと存じます。

以上で事務局からの説明を終わります。

川 勝 知 事： どうもありがとうございました。

それでは、まずは実践委員会を代表して、本日おいでいただいております池上副委員長から、実践委員会での協議内容に触れていただきながら、あわせて御意見もいただきたいと存じます。

池 上 副委員長： ただいま御紹介にあずかりました実践委員会副委員長の池上でございます。

お手元の次第資料の1ページをまず皆さん、ごらんいただけますで

しょうか。

これから私は、本日の協議事項、論点、黒い背景に白抜きになっているこのポイントについて、5つの項目を実践委員会の総括として紹介いたします。

また、そのそれぞれの項目について、2ページから4ページにまたがる資料1の中から幾つかの御意見を少し膨らませて御紹介していきたいと思います。

それでは、1ページにお戻りください。

今回の論点は、教育現場でのプロフェッショナル人材の活用及び子供たちが仕事の現場を体験する機会の充実というテーマになっております。子供たちが農林水産業、工業、商業等を学ぶ上で、地域で活躍するプロフェッショナル人材を学校教育の中でどのように活用していくべきか。また、子供たちが積極的に学校の外に出て行う地域の魅力ある農林水産業、工業、商業等についての学びをどのように活発化し、深めていくかということについて、実践委員会では協議いたしました。

まず、大前提となるのが、静岡県ではこういった取組を既にたくさんやっているということです。しかしながら、今年度から新たに加わった静岡県内出身の大学院生、たまたまその子は本学を卒業して、東京大学の大学院に行ったわけですけれども、会議の中で非常にショッキングな発言をしました。つまり、私たちがたくさんやっていると思っていたこういった職業体験のほとんどを覚えていないという発言をしたわけです。したがって、どうやるかということ、私たちはよっぽど考えなきゃいけないくて、子供たちの記憶に残り、それが何年か経った後で、みずからの将来を考えると時の参照点となるような、そういう体験に仕立てていくには何が必要かということで議論を展開いたしました。

それでは1点目、キャリア教育を通じて、子供たちにさまざまな産業の重要性や将来の静岡県を支える人材として期待されていることを認識させることが大事だというポイントです。これについては、2ページのところに白丸が5つありますけれども、その中で特に4番目のところと5番目を若干紹介します。

今回、対象とするところに、いわゆる教育、保健医療、人材開発といったヒューマンサービス分野が抜けているように思われると。したがって、農林水産業、工業、商業に捉われず、これから少子・高齢化の時代に求められる新しいヒューマンサービス分野も視野に入れていくといいのではないかという御意見がありました。

それから、さらに根幹的な御指摘で、子供たちがなぜ自分が義務教育を受けているかということを理解させる必要があるのではないかという御指摘をいただきました。つまり、義務教育を受けている理由をしっかりと自分の中で内在化することによって、さまざまな職業体験

の意味も捉えられていくのではないかという指摘でした。

2つ目は、地域の多様な資源を活用し、社会総がかりで実学を奨励するには、活用可能な人材などの地域資源をリスト化、見える化する。それとともに現有施設の一層の利活用が必要だという話でした。これについても、2ページ目の一番下の白丸のところをちょっと紹介したいと思います。

経済界の委員の中からこんな御意見がありました。経済界から現場へ派遣できる人材をリストアップすることも可能だと。また、そうした協力を行う企業側の研修も行う必要があるというような御意見を経済界側からいただきました。

資料3ページのところに、さらに丸が幾つか並んでいます。特に丸の2つ目と3つ目、これがかなり重要なのではないかと私自身は思っております。

実は、横浜市のある中学校区での事例を御紹介いただきました。それは、地域に存在する資源を落とし込んだマップで、こんな人がいる、こんな場所があるとまとめられています。さらにそれを小・中学校9年間でのまちの宝を生かしたキャリア教育とカリキュラムの関連づけを整理した表を作成したということです。

つまり、これまでのように単発で場当たりに子供に体験させるのではなくて、キャリア教育の全体像を時間と空間の中で見える化して、その全体マップに基づきながら、学校もカリキュラムの中で職業体験を組んでいくし、またあるとき学校にやってきてくれる方々も、地域の子供たちがどういう学びをした上で、きょう自分が行って話をするのかという全体の位置づけがわかってくる。そういう見える化をするような工夫を、実際導入した中学校区の実例を見せていただいて、大変意味があるなあと思ったわけです。

もちろん単発のものがいけないとは言っていません。これは例えばですけど、私の子供が中学校のとき、立志式というのに出席したことがあります、15歳の時の式ですね。そのときのPTA会長さん、たまたまJRの方でしたので、御挨拶されたときに、こんな問いを發しました。「皆さん、新幹線は誰が動かしていると思いますか」と。当然、運転士だと思いました。でも、そうやって質問するからには運転士じゃないだろうということが、もう中学生だったらわかる。出発のサインを送る駅員さんもいますねというような答えを引き出しながら、実はそれだけじゃない。例えば電気を送る人がいるわけだし、もしダイヤが乱れたときにそれを調整する人だっているはずだと、そういったたくさんの方がいて、実は新幹線は動いているんですよと言った時に、子供たちの表情がすっと変わったんですね。つまり目に見えるものだけが仕事ではなくて、その背景にはさまざまな人のかかわりがあって、新幹線が動いているということをリアルにみんなが共有した瞬間でした。

そのとき、たまたまその方がPTA会長だったから、お話をいただいたわけで、それも意味があるのですが、もっと地域の全体の中に位置づけて、そういう話が出てくると、より効果があるのではないかと感じた次第です。

3番目、職業体験を行う上で、教職員の負担を減らして、子供たちの学びを深めるには、学校と地域企業等をつなぐコーディネーター役が必要だということです。これも複数の委員から出てまいりました。今現在、学校の先生方は大変忙しいので、先ほど申し上げたような時間と空間の中に位置づけて人を探してくるとか、一々説明するというのはほとんどできないだろうと思います。複数の学校、あるいは複数の中学校区をつなぐコーディネーターが介在することで、より効果的な学びに展開していくのではないかという指摘がありました。

4番目です。職業体験等を子供たちの将来のキャリア形成に役立つものとするには、学校のカリキュラムの中で継続的、主体的に取り組ませることが大事だと。ポイントは継続的、主体的というところです。

資料4ページのところには、それに関する意見が書いてあります。つまり、1回行ったきりでは覚えていない。長期的、あるいは私がおこなうことに行きたいという主体性を持って行く、さらに二、三回繰り返したりするということによって、学習を深化させるような仕掛けが求められるのではないかということです。

5番目、学校の教育活動の中で行われている実学を学ぶ理科の実験、演劇などの芸術活動等も一層充実が必要だということもありました。これも4ページに幾つか関連の意見がありますけれども、例えば、体験して終わりではなくて、その体験を仲間に伝えたり、仲間が書いた作文をもとに、またみんなで意見交換をしたりという体験がさらにその子たちの中で内面化され、また仲間と共有されることで、その経験に立体的な気づきを与えていくという仕掛けも必要ではないかという意見が出ていました。

すなわち、静岡県下ではたくさんのこうした職業体験の機会はあるのだけれども、もう一工夫することで、その体験がより有意義なものになっていくのではないか。どうも皆さん忙しくて、とりあえず目の前にある資源を使って、場当たりのと言ってしまうのが悪いですが、こなししている。そこに全体の計画を持って、コーディネーターがつないで、子供たちが主体的に学び、継続的に学び、さらにそれをアウトプットして仲間と共有しながらかみしめていく。こういう仕立てにすることで、ここに書いてあるようなプロフェッショナルな人材が生かされ、また子供たちが現場の体験を深めていく、そういう仕掛けになっていくのではないかというのが実践委員会からの意見でございます。以上です。

川 勝 知 事： どうも池上先生、ありがとうございます。

今の実践委員会からの御報告も踏まえまして、教育委員の皆様方からの御意見を頂戴したいと思えます。いかがでしょうか。どなたからでも結構ですが。

齊 藤 委 員： 教育委員の齊藤でございますけれども、池上先生が今、1回だけ職業見学に行っただけでは、後になって子供は覚えていないというお話があって、それはどういうことかなというと、やっぱり行ったところに魅力がなかった、だから思い出せない。やっぱり一工夫が必要なのかなというふうに思いました。

自動車の製造現場で流れ作業をやっているところを見せたり、金型の工場に行って現場を見せたりというのは、そんなことを言っちゃ失礼ですが、やっぱり魅力がないのではないかなと。それよりももっと、むしろ企業がどういうことを新しくディベロップしようとしているのかというようなところを、これは企業秘密なんだろうけれども、そういうところまで企業側と話し合いをして、より子供に夢を与えるようなものを見せていただくということを、あらかじめ企業とよくお話をするというのも非常に大切だなあと。

長泉町の特種製紙、これは今、東海パルプと一緒にあって、特種東海製紙という会社がありますね。あそこに企業博物館がありまして、そこに行くと、本当に明治以来、今までにどういう紙をつくってきたかという、特殊な紙がいっぱいあって、これは企業博物館として非常におもしろいなと。きれいな女子社員が一々全部説明してくれるんですけれども。掛川にはまた資生堂という会社があって、資生堂の企業博物館と、それから美術館もあそこにはあって、工場もある。これはやっぱり女の子たちにとっては、資生堂というのが明治5年創業以来、どういう歴史をもって日本の女性の美を追求してきたのかということが、そこに行くと目の当たりにわかる。現場を見るよりも、そういうコーポレートヒストリーというか、会社の開発の歴史ですよ。そういったものから子供の夢というものが、ああそうか、こういうことか、ちょっと関心出てきたな、そういうものならきっと覚えているんじゃないかなというふうに思うので、そういう意味で、やっぱり事業所に対してどういうようなことを体験していただくかということをお勧めします。

それからもう一つ、後から出てくるかもしれませんが、先に言っちゃったと言われるかもしれないですが、先々週、相良高校という高等学校に、牧之原市ですけれども行ってきまして、相良高校というのが、SCHといって、Super Community Based High School、超地域密着型高校、そういうプロジェクトを展開していて、もう90年ぐらい歴史がある。もともとは家政女学校という旧制の女子教育のところだった。今は共学になって、普通科が半分、商業科が半分。160人ぐらい卒業

生が学年で出るわけだけでも、そのうちの半分が地元の企業に就職する。あそこにはスズキとかお茶の伊藤園とかもあるし、そうではなく個人商店だったり、個人でやっている工務店だったり、スーパーだったり、そういう小さいところもいっぱいあるわけですが、ともかく80%、全部100%地元で就職する。残りの80人が進学だけれども、大半が大学じゃなくて専門学校。ここは簿記の部活が全国大会に出場しているというところですが、観光とかの専門学校とか、調理の専門学校とか、あるいは美容の専門学校とか、女の子なんかはお菓子をつくる、スイーツをつくる専門学校とか、アニメの専門学校とか、そういったところに進学しているということですが、

そういう背景の学校の中で、SCHというのはどういうことかというのと、地域の商店街の人たちがやっているお祭りに参加して物を売るとか、地域がやっている神社のお祭りの神事に参加するとか、あるいはその土地を映画のロケーションとかコマーシャルのロケーションなんかを誘致するために、フィルムコミッションといったと思いますが、自分たちでそういう地域の魅力をパワーポイントでプレゼンするというような非常におもしろい活動をやっている、延べにすると2,000人ぐらいの生徒が1年間でそういうプロジェクトに参加しているという話をされました。70ぐらいプロジェクトがあると言っていましたけど。

来年が、賄賂で有名な老中・田沼意次が、これは相良藩の藩主から江戸幕府に上がったわけだけれども、生誕300年ということで、今その売り出しを高校生が一生懸命考えていて、それで小判の形をしたワイロ最中、僕も食べましたけど、おいしかったです、そういうような活動をやっている。あれがまさに職業体験といいますか、やっぱり実学というのは座学じゃないんだと。やっぱり学校を飛び出して、そこで体や足を動かしながらやるのが実学だと思うので、そういう体験をすれば、ああ、やったということ絶対みんな忘れちゃうことはないんじゃないかというふうに思うので、そういう工夫というものもまだまだ余地があるのかな、と感じました。

すみません、長い話をしまして。以上です。

興 委 員： 私は、前回の実践委員会を傍聴した者でございまして、今、池上副委員長の御説明をお聞きして、若干私の受けた印象以上に脚色されているように感じられました。本日配布されているこのペーパー全体として、当日のこれはという意見がうまく集約されていると思うんですが。その上で、副委員長が冒頭おっしゃったのは、東大に行っている大学の大学院生の方の発言です。海外におけるボランティア活動をなさったので、そこを踏まえた議論の流れを強調されたのですが、この会議にあって、そういう意見はむしろ4ページのほうに確かに触れられておりまして、私の印象としては、非常にいい意味での、

総花的という表現は適切ではないですが、幅広い非常に魅力ある取組が当日の議論であり、そうした報告が今日の資料の中に記載されているだろうと思うのです。その上で、先ほど池上副委員長の言われた問題に立ち戻ってみますと、確かに自主性なく職場経験もしてみたけれど記憶に残っていないというのは、結構強い意見であったろうし、それは彼女だけの問題じゃなくて、ほかの人からも同じような意見があったと私は思います。

この問題は、こういうキャリア教育云々ということだけではなくて、学校教育の現場の問題も同じような問題を含んでいるだろうと思います。教育の取組全体が、果たして心に残るような、その人の本当に力になるような教育が行われているかという問題と、ほとんど変わらないだろうと思っています。、そうして見ますと、現場体験を受けようとする子供たちに、タイムリーな適切な情報として提供できるよう、工夫していくことをうまく考えていくことが必要だろうと思いました。

そういう意味で、きょうこのお話をいただきました各項目の中で、これからどういうふうに手順を追って具体化していくことが重要な問題だろうということを、私としては意見を言わせていただきたいと思った次第です。

さらに斉藤委員が企業博物館の話をなさいました。実践委員会では、宮城先生が総監督としてのいろんな取組に関わられ、あるいは御自身が学校の現場に行って、非常に影響を受けたというような、魅力あるお話があったかと思えます。

静岡県はものづくりのメッカとして、特に浜松地域がまさにものづくり。静岡地区はむしろ江戸時代からの非常に古い工芸というのですか、歴史を集積したようなものがございます。ピアノ博物館とか、その他のスズキの博物館などございます。私も拝見させていただきましたが、すごく魅力があるのですよね。これからは、このすばらしい財産を見てもらって、なぜこれがこういう形で集積されてきたかという実績を理解して欲しいと考えます。そのため、歴史の流れの事実を淡々と説明できる、そういうインストラクターのような方が、こういう博物館の中に育って下さることによって、生徒諸君とか子供たちに、静岡のものづくりというのはいかにパワーがあるかということが見えてくるのだろうと思います。せっきく県内にある、そういう博物館、そのほか美術館も同様ですが、その活用のあり方を教育の現場として取り組んでいくことが必要だろうということを、あえて申し上げておきたいと思えます。

その中で1つだけ、これは後ほどまた言及させていただきたいと思いますが、2ページの下の方に地域人材や地域資源をより効果的に活用するための意見ということで、経済界から現場へ派遣できる制度、これはとても重要なことだろうと思います。

経済界のみならず、いろいろな分野においてもこの問題はあるかと思えます。後ほどまたお話を申し上げたいと思えますが、いわゆる基本的人権の問題など、主権者教育の問題もそうですけれど、どういう人材がそういう個々の問題にかかわったらいいいのかということのヒントがこの中にあったのではないかとということをお申し上げて、私の所感とさせていただきます。

渡 邊 委 員： 私も、この題をいただきまして、小・中・高どのような形で何かできることはないかと、友人等でキャリア教育等に携わっている者もおりましたので、いろいろみんなに連絡をとって、何かいいアイデアないですかというような形で聞いてまいりました。

小学校の場において、当時やったことが記憶に残っていないというような発言があったようですけれども、私はそれについては、余り記憶に残っていないことが悪いというような印象ではないんですね。なぜかという、やはり小学校のときには先入観を持たずにいろいろな活動をして、私相良高の時にも言ったのですが、まだ心や感性が柔らかいうちにいろいろな体験をすることによって、恐らく言語化はできないけれども、自分の中に、これはちょっと好きかもしれないとか、これはちょっと向いていないかもしれないとか、体験的に積み重なっていく判断材料のようなものを蓄積する時期なのではないかと考えています。

なので、例えば小学校で職業体験をしたからといって、これを一生の仕事にしようというものが見つかる可能性というのは、ちょっと余りないのかなと。そこを期待しての体験では、小学校のレベルではないのかなという気がいたします。

しかしながら、小学生向けのいろいろな体験というのは、本当にいろんなバラエティーに富んだメニューがありまして、例えば三島地域ですと、宇宙の学校という親子でJAXAの宇宙教育センターの方から講義を受けられるような機会があって、小学生がドローンのシミュレーターを触らせてもらうとか、企業の方の協力でそんなことに触れる体験もありますし、ちびっ子あきんど体験といいまして、夏休みの期間にお店屋さんで相談して、じゃあこのお店の商品についてどんな広告を出したら皆さんに買ってもらえるだろうかという作戦を練りまして、ある夏休みの一日、決まった日に、子供たちが描いた作戦どおりに販売の活動をしてみるというのを商店街の人と協力してやってみるとか、そんな様々な活動を通して、子供たちの心の中に何か、働かってこういうことなのかなと自分がやりたいことのイメージをつくっていくのが小学校なのかなと思えました。

残念なのが中学校で、せっかく小学校で何となくいろんな活動をして、いろいろな種をまいた、心の中に種をまいたものが、中学に行くとどうしても勉強と部活ということを最優先にしなければならないの

で、その時芽生えたものをどういうふうに育てていくかというようなことがないままに、高校であるとか、その先ということを決めなければいけないような気がいたします。

その中で、私の友人がおもしろいことを言っていて、中学校ってスポーツとか音楽とかの部活はあるけれども、ものづくりの部活ってないよねと。せっかくものづくりが好きな子もいるはずなのに、ものづくりをさせてあげられないというのはちょっとかわいそうだということ言っていて、ものづくり部活とかってできないか、なんてことを言っていました。

私が、磐田ではスポーツ部活やっていて、中学生が自分でやりたいスポーツがないのをサポートしてくれるようなことが始まったみたいだよ、なんて話をしましたら、それってものづくりでも応用できそうだね、例えば、週に二、三回、周辺の中学校二、三校でもものづくりをやりたいという子供を集めて、公民館等で地域の人に指導を受けながら部活形式でやるということもできそうだというようなアイデアが出ましたので、もしかしたらこれも一つの方法かなと思いました。

そして、先ほどの相良高校の件もあったんですけども、相良高校で私が感心したのは、グラフィックデザインの実習の事業で、地域の方々が入って、しっかりとソフトの使い方を教えてくださっていたんですね。しっかりと1人1台パソコンも用意されていて、その専用のソフトも入っていると。やはり地域の方に入っていて、高いレベルの体験をさせていただくためには、物がそろっていることが必要なのではないかなあというのを非常に感じました。

たまたま相良高校ではコンピューターであったわけですが、工業分野、農業、もしくは商業の分野で地域の高いレベルの方が入ってきて教えてあげますよといったときに、それに対応できるようなシステム、物がそろっているのだろうか、設備がちゃんとあるのだろうか。せっかく高いレベルの技術を教えてあげたいと思って来てくださっても、そこにあるものがちょっと残念な、古いものがそのままになっていたとかいうと、せっかく教えてあげようという意欲を持ってきた方がっかりさせてしまうというのは残念なので、その学校に応じた設備を充実させるということも、地域の方に学校に来て教えていただくためには必要ではないかなと強く感じました。

そして、先ほどから実践委員会の皆さんの意見も伺った中での、通じてなんですけど、先ほどの相良高校の体験にしても、学校の先生が非常に高い知識を持ってコーディネートしていたというのが印象的でした。小・中・高を通じて、どのようにキャリア教育を、その地域に応じたキャリア教育をコーディネートしていくかということは、なかなか今、専門家がない状態であるわけですね。学校支援地域本部をスタートしたときにも学校支援のコーディネーターの養成講座があったように、今後、その地域に応じたキャリア教育のコーディネートを

するのであれば、キャリア教育コーディネーターというような人を育成するようなカリキュラムがあってもいいのかなと思って、もしそういうものがあったら、自分も受けてみたいなという望みを持ちまして、そのような提案をさせていただきます。以上です。

藤井委員： 教育委員の藤井です。よろしくお願いいたします。

学校教育の中で、今回の主題である「技芸を磨く実学」を奨励するというのをちょっと置きかえて考えてみますと、児童・生徒が学校の内外での活動を通じて自分を発見し、己を知って、社会とのつながりを体で理解するというのではないかなと思います。そして、そうした発見や理解を通じて、それぞれの個性が自由に伸ばされることにも置き換えられるというふうに考えます。

これらの点で、実学の促進に取り組んでいくには、教室の中で授業を通じて教えるという手法よりも、やはりいかに多様な学外の世界に触れる機会を与えていくかという点が非常に重要なことだと考えます。これも立派な勉学の一環だというふうに思います。

このためには、子供たちが普段なかなか接することのない実社会の技術や知恵、ノウハウというものだけではなく、もっと違った角度から労働の価値であるとか、あるいは自然との共生というテーマであったり、あるいは例えば病院事業であったり、あるいは生産・製造のグローバル展開ということもそうでしょうし、地域とのかかわり合いなど何でも構わないので、学内の勉学を離れ、幅広い分野とか場面を多角的にできるだけ多く実学として接する機会を組み込んでいく必要があるというふうに思います。

さらに、あえて特に、やはり小さい時から、こうした多様な実学に継続的に触れることで、子供たちが自分たちの琴線に触れる気付きの機会を多く持てる工夫も大切だというふうに思います。

加えて、実学においては、子供たちが単に話を聞くだけの受け身型の手法ではなくて、子供たちがみずから見る、触れる、創るといった能動的かつ主体的な行動を促すことと同時に、実際に手を汚して経験してみる体験型の工夫を積極的に導入していくことも欠かせないと思います。

さらに、そうした能動的な実学の学習では、体験したらおしまいということではなくて、そのフォローアップがさらに重要だと思います。つまり、体験から何を学んでどういうことを感じたのか、また、その体験を経て自分はどうしようと思ったのか、あるいは何か思うところがあったのか、という点を、子供たちの個人であれ、グループであれ、やはりやりっ放しにはせず、子供たちの人間としての糧にしていく、そうしたフォローアップ活動が欠かせないというふうに思います。

一方で、体験型の実学ということとは別に、子供たちが受け身の立

場で教えられるということではなくて、みずから考え、みずから学ぶ主体性を育む手段として、実学に絡めた、いわゆるテーマを定めたケーススタディーのような機会、これを体系的に設営することも得策ではないかなというふうに思います。

これも、単に考えをまとめる実学学習だけではなくて、しっかりと自らの意見を述べる機会を与えること、またその議論をさせること、そしてまた、それらをまとめて発表すること、総合評価をすること、あるいはその反省をするといった過程を欠かさずに行うことで、より実社会に近い実学教育になるのではないかと思います。

そして、こうした取組を総合的に展開していけば、小さいころから自分の中に潜在する自分の興味、あるいは自らの希望などを発掘できるような機会につながるようになって、同時に自分たちの将来を描きやすくなるというふうに思います。また、いい意味での結果として、独立心であるとか、あるいは自立性、そういうものが醸成されることにつながりますし、ひいては自尊心、あるいは自負心も育まれて、この結果として技芸の道を自ら進んで選ぶ者も多くなっていくのではないかなというふうに思います。

どちらかというところ、今までの教育そのものが、厳しい評価かもしれませんが、金太郎飴のような人材を育てる形が強かったと思いますが、それよりもむしろ出っ張る杭、多種多様な杭をたくさん、いい意味で育てて、あえてちぐはぐでも構わないから、個性豊かな子供たちになってほしいというふうに思います。

多少、大上段に構えたことですが、とりわけ日本の人口が減っていく中で、日本がグローバル化の波に向かっていくには、こうした考え方で実学を身につけた人材、多様な価値観や文化を理解する人材の育成というのが絶対的に不可欠で、いわば日本の力、日本力を継承し、成長させていくためには欠かしてはならないことだというふうに思います。

一方で、テーマにありましたプロフェッショナル人材の活用という点ですが、確かにコーディネーターを活用するというのも一つの手法であって、現実的だと思うんですが、それとは別に、学校の現場だけで自ら考え、やっていくことの限界というところと失礼ですが、やはり授業を進めていくとか、学校本来の業務がたくさんある中での実学奨励ということになると、非常に発想がしにくい環境にあると思います。むしろ学校は全てを自前でやらずに、外のサービスを積極的に利用していくような考え方、いわば外出しをうまく利用していく、活用していくというような発想も新たに必要ではないかなと思います。

実際にそういうサービスを提供できるところがどの程度あるかというのは、まだまだこれからの話だと思いますが、むしろ学校側からそういうニーズが出てくるに従い、あるいは出てくればくるだけ、新た

な産業の振興ということにもつながっていくわけで、いわば教育産業というものを育てるという意味合いも含めて、学校と産業界がそういう接点で膨らんでいく、うまく相互に利用していくというような考え方が出てきてもいいのではないかなと考えます。以上です。

川 勝 知 事： 一わたり出てきましたので、あとは御自由に、順番にではなくてですね。

興 委 員： きょうの協議事項、若干、錯覚に陥っているところがあるのか、社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励というタイトルの最初、1ページの上になら書かれています、「有徳の人」の育成には、「知性を高める学習」だけでなく、小さなころから「技芸を磨く実学」に触れる機会を与え、となっており。私もそう思ってしまいましたが、かなり多くの意見は、実学を前提とする技芸を磨く実学の奨励という観点ではなくて、キャリアパスとしてのプロフェッショナル人材の活用も含めてでしょうけれど、やっぱり有為な人材をどう育てていくかという議論になったのではないかと思います。もっとピンポイントに、このタイトルであるような技芸を磨く実学をどう奨励したらいいかということからちょっと外れてしまっており、もっと的を絞った議論が欲しかったかなという印象を受けました。

そういう意味では、若干、私も先程、博物館とか美術館を活用して、そこに蓄積されている成果をうまくどう継承させていくかが重要だということを申し上げましたが、別の比喻として、親の背を見て子供は育つということを見せていくことで、そうした館の意味が出てくるものと思います。

以上、ちょっと付言させていただきたいと思います。

齊 藤 委 員： 今、この中で商業とか農林水産業とか、とくに商業というのが非常に難しい局面になっていて、いわゆるまちの個人の小売商店というのがどんどん減っているという状況があります。それで、後継者、自分の息子もそれを継ぐ気持ちがないということで、なかなかそういうものを起業しようというのが難しいのかなと。

そういうところに体験に行ったとしても、来店客数が減っているんだから、1日いたけどお客さん1人か2人しか話ができなかったかということになって、つまらなかったね、退屈でしたよ、ということになっちゃうと、それは体験としてこれはまずいなあと思うので。

でも、小売商店というものが、例えば花屋さんであるとか、さっき言ったスイーツのお店であるとかが、非常に小学生人気のランキングからいうと上に、女の子のランキングの上の方に来ていると。ですから、やっぱり魅力が出るようなところを用意していくということが大切だなあというふうに思いますね。

それから、農業の分野で言えば、やっぱり農業というのは非常に見直されているだろうと思うし、殊に新しい花を咲かそうとか、新しい品種を作ってみようとかというのは、小学校の女の子にとっては憧れの一つだと思う。

磐田に農林大学校というところがあって、前に教育委員会でも見せていただいたことがあったけれども、いろんな花の新しい品種を作っていますよね。ですから、ああいうところに子供たちを連れていくというのも、ああそうか、何か農業のイメージとちょっと違う、こういう世界もあるんだなというサプライズを、子供たちに与えるようなことというのも、これは静岡大学の農学部でもいいわけですけども、そういうのも従来型のいわゆる職業分類じゃない部分というものが、まだまだ魅力を出せる余地が残っているのかなと、そんなふうにも感じました。

藤井委員： 今、斉藤委員が言われた御指摘というのは、実際にあると思うんですよね。生徒を工場見学へ連れていったって、例えば40人いるうちの何人がそれに興味を示すかということ、全員が同じように興味を示すとは限らないわけですね。

ですから、そういう意味で、なるべくいろいろな幅広い分野に接することが必要だと思います。それこそ例えば、今身近なところで話題になっているドローンについてどういう活用のされ方をしているか、あるいはこれからどういうふうに活用され得るのかななどを考える場面に触れることは、ドローンがこれからもっと子供たちにとって身近な存在になるという観点からすれば、非常にいい刺激を与えられると思います。言いたいことは、要するに幅広い分野、場面での実学に触れるような機会をいかに多く与えるかという点に尽きると思うんです。

それを考えていくと、先ほど触れたとおり、学校の先生が学校の業務に集中するのが責任と立場なので、そこだけに集中している方々が、世の中全体を見渡してこういう実学に触れる機会を与えようと思っても、なかなか発想として出てこないと思うんです。ですから、そういう意味で、実際にプロフェッショナルとして、教育産業も含めてですが、やっておられる方々からどんどんいろんなテーマ、アイデアを吸い上げる、あるいは協力を得て連携してやっていくというような体制が、これからの実学の奨励には欠かせない点ではないかと思います。

川勝知事： 補足的に、何かありますか。

渡邊委員： 今の子供たちは、学校であるとか教育の中で実学をということなんですが、じゃあ私たちが学生のときに、どのように職業に対しての意識とか、そういうことを体験したかということ、やっぱりアルバイトの

ようなことをやった経験から、社会というのはこういうものなのかなあということを知ってきたような覚えがあるんですね。

先日、ちょっとした記事で読んだのですが、九州の野球部のある高校のお正月休みの宿題が、1週間アルバイトをして遠征費を稼ぐということだそうです。短期アルバイトを経験して、自分でお金を稼いで、自分の活動費に充てるということが目標であったということで、そもそもの、いろいろな職業があるという以前に、お金を稼ぐというのはこういうことだというイメージがない学生もまだまだたくさんいるということを見ると、許される範囲での短期アルバイトというようなことも経験させてやりたいなど。例えば、実学系の高校でない子供たちにも体験させてやりたいという思いもありました。

また、特に農業関係かと思うんですが、農繁期に本当に猫の手も借りたいほど忙しい農業の方たちと農業を学んでいる子供たちが接する機会などもつくっていったら、そういうことを単位として認めてあげるとか、外での活動をいかに学びとして結びつけてあげられるかという工夫が、これからできるような可能性を感じました。

川 勝 知 事： どうもありがとうございました。

基本的に学校の外、広く社会と言っていいと思いますけれども、そこを活用するということですね。それが共通のお話だったのではないかと。

先ほどの相良高校の場合も、地域に密着するというところで、学校の外でさまざまな活動に高校生が参加しているというのも、学校での座学とは違うところで相良高校の特徴が出ているということですね。

そして、それをどこでやるかと。先ほど美術館だとか、博物館だとか、あるいは公共の施設、ここにスズキもピアノも、それから先ほどの特種東海も確かに素晴らしいですね。そういうところも十分に教材になると、教室になるということですね。

それから、行ったところがおもしろくなければ、魅力的にきっちり説明できるようになっていなければ、時間の無駄になりかねないというところがあったみたいですね。

それから、プロフェッショナル人材ということになりますと、やはりこれはプロフェッショナルであった人も含めたほうがいいと思うんですね、定年退職した人たち。私どもは、75までは現役ということで、壮年期に分類しているわけですが、早いところでは60年で定年、通常でも65ぐらいで定年と。あるいは、もう70になったら定年という気持ちでいる人が大半と。しかしながら、実際に皆さんお元気なので、こうした人たちを先ほど藤井さんがおっしゃったように、どういうふうに連携して、皆さんのプロフェッショナルな実学のわざ、あるいは経験、技術を体系的に子供たちに伝えていくかという、そういう意味で、人材バンクのようなものはやっぱり必要かなと思いました。

それと同時に、先ほど学校制自体が、小学校や中学校の現場から見ると、高等学校、あるいは磐田の農林大学校とか、あるいは田方の農業高等学校、あるいは磐田の農業高等学校、あるいは静岡にも農業高校がありますけれども、そういうところに小学生が行けば、そこにお兄さん、お姉さんがいるわけですね。そういうお兄さん、お姉さんから学ぶという風になると、これは先生がいるのとまたちょっと違う刺激もあるだろうということで、ジオパークについては高等学校の学生さんが小学校に出掛けて行って、小学生にわかるような工夫をして教えていますね。そういうことをしながら現場に連れ出すということもしているわけですが、この新しい実学というのに賛同されている意見が大半だということがわかりまして、これを進めていきたいと思う次第であります。

そもそも学校がなかったときは実学しかなかったと。実学という覚悟は別にしまして、豊田佐吉がちょうど150年前にお生まれになった時に、お父さんの大工仕事を見よう見まねで手伝って、農家ですと一家総出でやっているところを手伝ってと、先ほど渡邊さんもおっしゃっていましたが、要するにそれで自然に実学を学ぶと。それだけでは人間は立派になれないということで、寺子屋に行きなさいと、いわば座学をしっかり学んで、文字も読める、文字も書けるということも学べということで。それが今度は逆転して、座学が中心になって実学を忘れているから、お父さんお母さんが何をしているかはわからんということになっているので、もう一度それをバランス良く、社会全体をテキストとして作り直そうということで、差し当たっては磐田でスポーツの人材バンクみたいなものを作りながら、学校卒を超えた子供たちへのスポーツの提供というのをやっておりまして、これは今のところラグビーと陸上競技ですけれども。

サッカーなどは本当に4つもプロフェッショナルのクラブがあるところというのは、47都道府県で静岡県だけじゃないでしょうか。そろばんの学校だったり、あるいはゴルフの学校もあるそうですが、サッカーの学校があれば、30ぐらいでもう現役を退くわけでしょう、サッカー選手。そのセカンドステージとして、サッカーをずうっと教え込んでいくことというようなこともできるかなと思ったりもしますが。

そういうスポーツですと割とわかりやすいんですけど、これをものづくりまで入れていくと、なかなか工夫が要ると思いますし、人材バンクをしっかり作りながら、この人たちが回るころをモデル校としてやっていくということもやらないと、一気呵成にはなかなかできないだろうという感想を持ちました。

ともあれ、新しい実学。知性を高めることは大切です、言うまでもありませんが、一方で、技芸を磨くということもあわせて大切です。それは、実は学校の外にあると。その外のものをどうこれから組織化していくかということが、施設を活用することも含めて大きな課題に

なったという印象を持った次第でございます。

池上さん、何かありますか。

池上 副委員長： 先ほど、興先生から脚色が多かったという御批判を受けましたけれども、一方で個々の意見は2ページから4ページにまとまっているので、ある種の、あのときの委員会のみんなが共有したストーリーみたいなものをきょう皆さんと共有したほうが議論を活性化するという意味では良いのかなあとということで、私の思いも含めてお話をさせていただきました。

少しだけ補足的にお話しする機会をいただけるとするならば、さっき知事もお話しされていましたが、静岡県が持つ漁業高等学園等の独自性のある施設をもっとキャリア教育の場として開放するということなので、これはきょう皆さんから出てきた企業博物館等の利活用といったこととも響き合うことかなあとと思います。

現場というときに、本当の現場ももちろんそうだけれども、例えば漁業の体験を漁船に乗ってといっても無理なので、疑似体験かもしれないけれども、そこにエッセンスを感じとれるような場所というのは多々あると思いますから、それを活用すると良いというような御意見もありましたし、また海外から来る研修生と一緒に実学の経験をすることは、国際交流という効果もあるんじゃないかということで、ここでもグローバル化の議論がなされていますけれども、グローバル化と実学体験というのを合わせることで、掛け算のような、つまりそういう場にいることで日本の、あるいは静岡県のこういった実学のすごさを体験するということにもなるんじゃないかというような御意見もあったことも、あわせてここで紹介しておきます。ありがとうございます。

川 勝 知 事： お時間も押してまいりました。このテーマに関しまして、さらに御発言がございましたらどうぞ。

では、興先生、どうぞ。

興 委 員： 実践委員会を含めた知事の御対応は極めて画期的であって、素晴らしいと思います。こういう形で総合教育会議が開催されておりますのは、他の都道府県を見てもまずはないだろうし、素晴らしいことだろうと私は高く評価しているわけですが、最近、この会議に県民の方々がどの程度傍聴されているか、あるいは関心を払っていらっしゃるかということが、県のホームページであるとか、いろいろなところを見ても、なかなか見えません。また、プレスの方々も御参加いただいておりますけれども、その方々の参加の人数もどうなのだろうかということもございまして、やはりこの総合教育会議をもっと県民に伝えるいろんな方法論も事務局で御検討下さると、とてもありがたいと思い

ます。

加えて、先ほど知事が冒頭におっしゃられましたけど、第3期としての知事という風におっしゃられました。今回の知事選挙において非常に驚くことは、いわゆる若い世代の投票率の低さでございます。まだ静岡県の選挙管理委員会からその投票率は発表されておりませんが、一部の地方新聞には20代、その次は10代の後半が2番目に低かったということが報道されております。

重要なのは、やはり若い世代の方々が高い関心を持って、主権者としての意識を現すような、そういう方法論を考えていくことこそ重要な教育の柱だろうと思っております。

そういう観点で、静岡県の教育委員会も主権者教育を積極的に取り組んでいこうとしているわけでございますけれど、今日の話題として、経済界から現場へ派遣できるという意味で、技芸を磨く実学というお話もございましたので申し上げておきたいことがあります。世界では、場合によっては政治家も参画するような、そういう主権者教育が行われているところもございます。何がいいかということではなくて、やはり社会というふうな目線で、そういう意味で、実践委員会でもこういう問題に取り組んでいただいて、それをこういう場で議論して、教育委員会の場に落とすという方法もあるんだろうと思っております。主権者としてどうしたら良いか、国民主権であるわけですから、自分の1票を誰に託すのかということは極めて重要な問題でございますので、そういう観点から、この問題を少し真剣に御検討を、まずは実践委員会でも、知事の方でも御検討下さるとありがたいと思っております。以上でございます。

川 勝 知 事： これはインターネットで流しますか。いわゆる事業仕分けとか事業レビューは全部流しているんですよ。これは、しかし大きな決断が要りますし、皆様方の御了解を得なくちゃいけませんけれども、とにかく皆さんのためにやっているわけですから、若い人たちがなかなかそういうものに接する機会がないというのは共通の悩みですから、何らかの広報の仕方については考えねばならないと思っております。ジャーナリストの人も今日はいらっしゃっているので、統計数字に表れている若い人たちの、行政であるとか、そうしたことに対する無関心というのは深刻な問題であると、それは共有しております。

さて、最初に具体的な御提言もいただきましたので、こうしたものは、時間のかかるものもあるかとも思いますが、共通事項を整理いたしまして、具体化できるものはそうしてまいりたいというふうに思います。またこれから議論をさらに深める必要があるということも感じました。

それでは、木苗先生、最後にお願ひします。

木 苗 教 育 長： 本日は、社会総がかりで取り組む「技芸を磨く実学」の奨励ということでお話しいただきました。委員会もそうですし、いろいろと各委員からもお話しいただきまして、皆さんの意見を十分理解させていただきました。

ただ、先生方も今も精いっぱい頑張っているものですから、これにまたさらにといって、特に今日の場合は実学というのが入っていますので、どの程度、どのように整理していったらいいのかなというのがあります。

それで、チーム学校、要するに学校、家庭、そして地域ですね。この中に産業というのも今回、相当入ってくるかなと思いました。私自身も十数年、産学連携をずっとやっていますので、特に東部のファルマバレー、それから中部のフーズ・サイエンス、西部のフォトンバレーと。実は昨年10月に第1回の高校生向けの実学チャレンジフェスタというのを草薙で行いました。三十数校の高校が参加してくれまして、大学生も一部参加してくれましたけれども、今度は第2回を10月14日に浜松の方でやります。これには、できれば先ほど言いましたような東部・中部・西部のファルマバレー、フーズ・サイエンス、それから光産業のほうのフォトンバレーも何らかの形で来て欲しいと、お越しいただけるように私のほうで努力したいなと思っておりましても、要するに子供たちといいですか、それには高校生が中心ですけれども、中学生も土曜日ですので参加できるようになっているんですけれども、そういうようなことで、小さい時から夢を持たせるような、そういう環境づくりが大事だと思うんですね。何から何まで上から目線でやるんじゃなくて、子供たちが来て、いろんなことにチャレンジする、あるいは大人と話し合いをする、あるいはいろいろな技術を学ぶというような、そういう機会を教育委員会としても積極的に作っていきたいなと思っています。

そういうことで、これからも教育委員会は今日の皆さんの御意見をいただいたものについて、また実践委員会からもいただいていますので、それをもう一度、十分にみんなで噛みしめてといいですか、さらに具現化して頑張っていきたいなと思っています。

きょうは貴重な御意見をいただきまして、どうもありがとうございました。

川 勝 知 事： 先生、ありがとうございました。

時間も参りましたので、以上で予定いたしました議事を終了いたします。

それでは、進行を事務局、お願いします。

事 務 局： 皆様、ありがとうございました。

次回、第2回総合教育会議は10月10日の開催を予定しております。

以上をもちまして、第1回総合教育会議を終了いたします。お疲れさまでございました。

皆様、長時間にわたり、ありがとうございました。

【閉 会】